

平成30年度
北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会
議事録

日時：平成30年7月10日（火）

14時00分 開会

場所：北海道博物館 講堂

平成 30 年度 北海道立総合博物館協議会
アイヌ民族文化研究センター専門部会議事録

会 議 名	平成 30 年度北海道立総合博物館協議会 アイヌ民族文化研究センター専門部会
開催日時	平成 30 年 7 月 10 日（火） 14 時 00 分～15 時 30 分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席委員	澤田一憲部会長、大島稔委員、児島恭子委員、酒井奈々子委員、 関根真紀委員、中村吉雄委員

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・丸括弧で補足的な説明を記した。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

目 次

1	開会	1
2	館長あいさつ	1
	《資料確認》	1
	《出席状況確認》	1
	《出席者紹介》	2
	《協議会の公開について》	2
	《部会長あいさつ》	2
3	議題	2
	議題（1）報告事項 1 平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会実施報告	3
	議題（2）報告事項 2 アイヌ民族文化研究センター平成 29 年度事業実績及び平成 30 年度 事業実施計画	3
	《質疑応答 1 アイヌ文化紹介小冊子「ポン カンピソシ」の配布について》	3
	《質疑応答 2 研究紀要のリポジトリ化について》	3
	議題（3）報告事項 3 百年記念施設の継承と活用について	4
	《質疑応答 3 「百年記念施設」という名称について》	5
	《意見 1 百年記念塔の老朽化に伴う安全対策について》	5
	《質疑応答 4 アイヌ民族文化研究センター専門部会での議論の意義について》	6
	《質疑応答 5 「北海道独自の文化」とは何か》	6
	《意見 2 「開拓の村」とその名称について》	7
	《意見 3 北海道博物館のアイヌ文化への取り組み姿勢について》	7
	議題（4）今後のスケジュールについて	8
	議題（5）意見交換・情報交換（要旨のみ）	8
4	閉会	9

1 開会

右代学芸主幹：平成 30 年度北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会を開催いたします。開催にあたりまして、石森館長から、ごあいさつを申し上げます。

2 館長あいさつ

石森館長：皆様こんにちは、石森でございます。ご多用のなかを、アイヌ民族文化研究センター専門部会にご参集たまわりまして、本当にありがたく思っております。

6 月 30 日に、特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎」を開かせていただきました。そしてその翌日の 7 月 1 日には、中村委員にご無理を申し上げて、千歳アイヌ文化伝承保存会の皆様に、古式舞踊その他をご披露いただきまして、120 人を超えるお客様に楽しんでいただけました。中村委員、本当にありがとうございました。また、帯広カムイトゥウポポ保存会、平取アイヌ文化保存会の皆様にも、また別の日に、それぞれ公演をお願いする予定でございます。今のところ、特別展は、大変順調にスタートできております。皆様方も、後でお時間ございましたら、ぜひともご案内させていただきたいと思っております。

今年度第 1 回の北海道立総合博物館協議会を 6 月に開催いたしまして、澤田部会長、そして児島委員にはご出席いただいております。本日は、アイヌ民族文化研究センターの専門部会でございますので、まずは 6 月に開催いたしました協議会の議事内容をお話しさせていただき、また、今年度のアイヌ民族文化研究センターとしての事業についてもご説明させていただいて、ご審議いただきます。さらに、この野幌森林公園や、北海道博物館の前身であります旧北海道開拓記念館は、約 50 年前に「百年記念施設」の一環として作られましたが、この百年記念施設については、様々な批判が生じたので、北海道 150 年においては、アイヌの皆様方とも手を合わせて、いろいろな形で、そういう点を克服しなければならないということで、百年記念施設を今後どうしていくか、今、道庁の方でいろいろ腐心しております。本日は、こういった点につきましても、皆様方にご説明をさせていただきます。

お忙しいなかでございますけれども、約 2 時間程度をご用意させていただいております。澤田部会長によりしくおとりなしをいただきまして、様々なご意見をいただけることをよりしくお願い申しあげまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。本日、皆様、本当にありがとうございます。

《資料確認》

右代学芸主幹：それでは、お手元の資料の確認をさせていただきます。

〈以下、配布資料について確認〉

《出席状況確認》

右代学芸主幹：出席状況の確認ですが、今回は委員全員に出席いただきました。専門部会の開催にあたって、出席についての規定はありませんが、北海道立総合博物館条例第 25 条

第2項で「協議会は、委員の2分の1以上の出席が必要」とあります。それに準じた形で、今回の専門部会についても成立していることをご報告いたします。

《出席者紹介》

右代学芸主幹：特別委員については、任期の2年目ですので、紹介は省略させていただきます。本専門部会に初めて出席する、本庁の出席者及び博物館の職員紹介を行います。北海道環境生活部文化局文化振興課 佐藤主幹でございます。

佐藤主幹：佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：高橋主幹でございます。

高橋主幹：文化振興課の高橋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：同じく、今主査でございます。

今主査：文化振興課の今です。どうぞよろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：環境生活部アイヌ政策推進局アイヌ政策課の栗原主幹です。

栗原主幹：栗原でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：4月1日に副館長が交替しております。山中副館長でございます。

山中副館長：山中でございます。よろしくお願いいたします。

右代学芸主幹：4月1日に新採用になりました、アイヌ民族文化研究センターの亀丸学芸員でございます。

亀丸学芸員：この4月より、アイヌ文化研究グループの民具担当として採用されました、亀丸由紀子と申します。卒業研究では耳飾りについての研究を行ってまいりました。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

《協議会の公開について》

右代学芸主幹：本日の専門部会は、道の公開条例の規定により、公開とさせていただきますので、よろしくどうぞお願いいたします。

《部会長あいさつ》

右代学芸主幹：これより先の進行につきましては、澤田部会長に進めていただきます。よろしくお願いいたします。

澤田部会長：イランカラブテ。本日の会議が北海道博物館にとって有意義な会議になるように、皆様、よろしくお願いいたします。議事の円滑な進行についてのご協力をお願い申しあげまして、簡単ですが、ご挨拶といたします。

3 議題

澤田部会長：専門部会の終了は概ね16時を予定しておりますので、よろしくお願いいたします。それでは議事に入ります。

議題（１） 報告事項１ 平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会実施報告

澤田部会長：報告事項 1「平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会実施報告」です。事務局から説明をお願いします。

右代学芸主幹：6 月 8 日に行われました、平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会の議事概要についてご報告いたします。

〈以下、配布資料 1 に基づいて、平成 30 年度第 1 回北海道立総合博物館協議会の実施報告を行う〉

澤田部会長：ただいまの報告は、この後の事項に関わる内容ですので、次に進みます。

議題（２） 報告事項２ アイヌ民族文化研究センター平成 29 年度事業実績及び平成 30 年度事業実施計画

澤田部会長：次に報告事項 2「アイヌ民族文化研究センター平成 29 年度事業実績及び平成 30 年度事業実施計画について」、事務局から説明をお願いします。最後にまとめて質疑応答させていただきます。それでは事務局から説明をお願いします。

〈以下、小川学芸副館長兼アイヌ民族文化研究センター長より、配布資料 2 に基づいて平成 29 年度アイヌ民族文化研究センター事業実績について、配布資料 3 に基づいて平成 30 年度アイヌ民族文化研究センター事業実施計画について説明〉

澤田部会長：ただ今の報告事項 1・2 につきまして、皆様からのご意見・ご質問をお願いします。

〈質疑応答 1 アイヌ文化紹介小冊子「ポン カンピソシ」の配布について〉

中村委員：博物館が出しているアイヌ文化紹介の小冊子は、館で配ってるだけなのか、学校関係にも配布してるのか、そのあたりをお尋ねします。

小川学芸副館長：小冊子は、初版を発行したときに、道内の学校にはすべてお送りしていましたが、予算の関係で全道の学校に各巻を 1 冊ずつをお送りしています。ですから、今までの使用の実績を見ていると、気づいてくださる先生からはすぐに反応が来て、「これを学校で使いたい」という連絡をくださいますし、何年か経って「そういう冊子が、うちに来ていましたか？」ということになってしまう場合もあります。引き続き、学校教育で使っていただけるように、お送りするところにはお送りする、あるいは「こういう冊子がある」ことを、機会を通じてお伝えしていきたいと思えます。

〈質疑応答 2 研究紀要のリポジトリ化について〉

大島委員：報告 1 で、研究成果の発信についての「リポジトリ化」の話が出ていましたが、

先ほどの説明ではどういう形でやるのか、あまり詳しく言われていなかったもので、その新しい形とは何なのか、よくわからなかったです。PDF での公開だけでは駄目なのでしょうか。リポジトリ化を進めていくということでしたが、そうすると、予算もかかりますので PDF で十分ではないか、どこがどのように違うのか少し説明してください。

小川学芸副館長：北海道博物館の研究紀要の誌面については、今の時点でも、PDF というインターネット上で誌面をご覧いただけるファイルの状態で作っております。そのうえで、協議会で要望がありましたリポジトリ化というのは、各大学などが作っているリポジトリに準じた形で、ただファイルが見られるだけではなくて、各論文に関する細かいデータも一緒に付いているなど、検索の便宜をあげるというものです。ただ、予算の見通しなしで、簡単には回答できませんので、今、担当する職員が調べていますけれども、格安もしくは無償で、ある程度のリポジトリを実現できるサービスを国でもやっていますので、そこにできる範囲で載せてもらうことを、こちらの作業の負担がどれぐらい増えるかを秤にかけながら進めていこうと考えています。

大島委員：やはりリスクについて考えなければいけないと思います。国でやってるものだと少しは安心でしょうし、PDF で出していたら、いろいろな加工ができないようになっていきますから、それはある程度安全ですけれども、それを調べないで簡単にやってしまうと、何もいいことがないと思いますので、慎重にやっていただければと思います。

澤田部会長：それでは、ただいまのご指摘等、いただきました事項につきましては、事務局で整理して、今後の研究センターの事業運営に反映させるよう、お願いします。

議題（3） 報告事項3 百年記念施設の継承と活用について

澤田部会長：次は報告事項3「百年記念施設の継承と活用について」です。事務局から説明をお願いします。

佐藤主幹：道庁環境生活部文化局文化振興課の主幹・佐藤でございます。本日は、この北海道立総合博物館協議会アイヌ民族文化研究センター専門部会にご出席させていただき、御礼申し上げます。本日、伺った趣旨は、いわゆる「百年記念施設」、これは北海道博物館、北海道開拓の村、それから百年記念塔の3つの施設の総称ですが、これらは昭和40年代の、いわゆる「百年記念事業」の一環で整備がなされたものです。今年は、北海道命名150年の節目の年でもあります。これらの施設は開設から約50年が経過いたしまして、施設の老朽化や、それともなう利用者数の減少等の課題が発生していることから、道では、これらの貴重な財産を次の世代にどのように引き継いでいくべきか、検討を行っております。そこで、これまでの経緯や、今後の議論の方向性、さらに現在の取り組み状況や、今後の進め方等につきまして、昨年11月に道が取りまとめた、「百年記念施設の継承と活用の考え方」という資料の内容に従って、ご報告させていただきます。

〈以下、配布資料4に基づいて、百年記念施設の継承と活用について説明〉

澤田部会長：ただ今の報告につきまして、皆様からのご意見・ご質問をお願いいたします。

《質疑応答3 「百年記念施設」という名称について》

大島委員：名称の問題ですけれども、「百年記念施設」という言葉が使われましたが、「百年記念」という施設の名称は、そのまま維持されて、ずっと使っているということですか？

佐藤主幹：これからですか？

大島委員：いいえ、今までも。もう既になくなった名称だと私は思っていたのですけれども、そうではないらしいので、改めて聞きます。博物館は、北海道開拓記念館から北海道博物館に名称が変わりました。これは「開拓」や「百年記念」ということに対して、つくられた当初から非常に批判があったことを踏まえてですので、良かったと思っております。では、「北海道開拓の村」はどうするか、それから「百年記念塔」という名称をどうするのでしょうか。百年記念塔については、費用がかかるから壊したほうが良いと私は思っていますが、百年記念塔の場合はそういう問題と名称の問題のふたつを考えないといけないと思っております。「開拓の村」については、実際に開拓当時の建物しかないのなら「開拓の村」という名前でもいいかと思えます。日本全国の施設でも、そういう名前の付け方はありますから。けれど、「百年記念塔」はまずいと思えますので、そのあたりは、議論されているのかどうか、少し気になりました。

澤田部会長：佐藤主幹、いかがですか？ これからも「百年記念施設」という形なのか、150年経っても200年経っても、そのようにしていくのか、議論したことはないのですか？

佐藤主幹：内部でも、「百年記念施設」という言い方はどうなのかという話があり、少し検討はしたいと思っております。

大島委員：もう50年前の建設当初からされている議論ですから、その歴史を踏まえないと駄目だと思います。

佐藤主幹：はい、わかりました。

《意見1 百年記念塔の老朽化に伴う安全対策について》

中村委員：記念塔の老齢化ということで、落下物があるという認識でいるならば、万が一の倒壊と落下物を考えると、そこに立入禁止措置を取らないといけません。そういうところを道民が散策・散歩するとなると、たいへん危機感があると思えます。先日の大阪の地震で、ブロック塀が崩れて学童が亡くなった件と同じです。この建築物が倒壊の危険性があるという認識であるならば、そのための措置を取ることを、まず提案します。

大島委員：予算で言いますと、壊すだけで4億円です。それで、塔を維持するとなったら25億円ですよ。あの塔は、はっきり言いますと、ハコモノ行政のときの遺物ではないですか。ですからあれは、なくさなければ、怖いし、費用も無駄になると思えます。その何十億円を他の文化振興に使った方が、よっぽどいいですよ。

中村委員：私が提案したことは、道の行政の予算措置などがありますから、今、質問したことに「答えろ」ということではありません。大阪で地震によってブロックが倒壊した例もありますから、そういう危険性を踏まえて、早い処置を上層部に要望していくことが、一番重要な課題だと思います。

佐藤主幹：はい、ありがとうございました。

《質疑応答4 アイヌ民族文化研究センター専門部会での議論の意義について》

児島委員：質問・意見とは、何を申し上げればいいのか、よくわからないのですが、たとえば、この百年記念施設の継承につきまして、北海道博物館のアイヌ民族文化研究センターは、どう関係するのですか？あるいは、今後、何か関係していくのでしょうか？

小川学芸副館長：百年記念施設の管理・運営などに、アイヌ民族文化研究センターが直接、関わっているわけではないです。けれども、「たとえば」で申しあげますと、こうした施設の見直しに関わって広く意見を聴取するとき以外にも、いろいろな機会を通じて、お客様からの問い合わせや意見という形で、ここでいただいているような様々な議論が博物館に寄せられます。特に『北海道100年』をどのように見るか、あるいは様々な自治体が市制何十周年などの周年行事をやるときに、「我が町の歴史を、どこからどういうふうに語るべきか」ということは、博物館全体に問い合わせとして参ります。そのなかでも、特にアイヌ民族文化研究センターで対応させていただくことが多いので、「施設そのものをどうするか」に留まらない形で今回の施設に関わる議論につながっている「北海道の歴史というものを、どういった形でとらえるか」、あるいは、自治体で様々な記念物・記念誌・記念行事として実施するときに、それを「どのようなものとして発信することが妥当・適切なのか、あるいは逆に不適當なのか」ということについては、やはり博物館全体としても関わりますし、特にアイヌ民族文化研究センターとしては、かなり頻繁に、あるいは注意深く関わらせていただいています。

《質疑応答5 「北海道独自の文化」とは何か》

児島委員：佐藤主幹に、この資料の主旨についてお聞きしたいです。資料4の1ページめにある、「これからどうするか」という考え方にあたる「趣旨」に、2020年以降を見据えて「世界に誇れる本道独自の文化」とありますが、それは何だと考えていらっしゃるのでしょうか。これから継承して残していくその文化が、たとえば開拓の村に、どのように表されていて、どういうものとして表れていると考えていて、このような説明としているのでしょうか。

「開拓してきたのだ」ということを発信していくのでしょうか。その根本が、私にはよくわかりません。「北海道の文化」とは何なのか。何を示そうとしているのでしょうか。「かつて、このように苦労してきた」ということは、わかるかもしれませんが、それをどのように考えていこうとするのか、よくわかりません。私も学生たちに「開拓の村に行ったことはあるか？」と聞いたら、学生は「小学生のときに行った」と言いまして、それでどういう印象

を持っているかという、普段やらない昔風の遊びをしたことをよく覚えています。その印象だけしかなくて、そこにある建物や、「それがどういうことだったのか」ということは、まったく関係ありません。「珍しい遊びをそこでやった」だけです。入場者や子どもたちを集めるには、カフェをやるなど、いろいろあると思います。けれど、おいしいものや昔の珍しいものが食べられて、「昔の人は苦勞したんだね」というだけで、それは文化を発信することになるのでしょうか。そのあたりはどうお考えなのか、うかがいたいです。

佐藤主幹：少なくとも開拓の村は、野外博物館として、開拓当時の歴史に親しむことなどについては、これまでそれなりにやってきたと個人的にも思うのですが、施設の老朽化や修繕費不足でできないこともあり、現に利用者も減少している状況がありますから、今までの価値は認めつつ、これから新たにどのように展開していったらいいか、考えたいと思います。

《意見2 「開拓の村」とその名称について》

大島委員：「開拓以後」でしたら「開拓の村」でいいと私は思います。ですが、もうひとつ、「開拓以前」のものは、開拓の村と同じような歴史的な建造物という形で残っていないですよ。二風谷にも、白老にも、他のところにはあるけれども、ここにはないですよ。

関根委員：私もそれは思います。

大島委員：不思議ですよ。開拓以前にあったものも含めて北海道博物館にあって、それで開拓の村があって、というのであれば、ストーリーとしてわからなくはないです。アイヌの人たちの作ってきた伝統の文化は、開拓の村より長い歴史があるのですが、大きな建物などは残っているわけではないわけから、やりようがないのかもしれませんが。けれども本来は、そういうところまで考えて、初めて「歴史」や「文化」という言葉を使えるはず。そこが多分、50年前にここをつくったときの構想として欠けていたと思います。だから「開拓記念館」という名前を使ってしまったわけです。「開拓」とは、別の意味から言うと exploitaion で、これは「侵略」や「植民」という言葉と同義です。ですから、良識ある人はいろいろな反対意見を述べましたが、そのまま「開拓記念館」という名称としてしまったわけです。それで、ずっと批判を浴びながらやってきたのですけれど、北海道庁では、これからは「共生」やいろいろなことをうたいだしているのに、もうそういう考えはないと聞いています。ですから、そこを打ち出さないと、これは無理ではないですか。今でも「百年記念施設」という名称を使っているのは、驚きです。根本的に変えなければ、発想は浮かばないのではないのでしょうか。

《意見3 北海道博物館のアイヌ文化への取り組み姿勢について》

中村委員：大島委員の発言と重なるかもしれませんが、やはり高度成長の時代と、開拓一辺倒の時代に関基100年を迎えてきたことは、まぎれもない事実でしょう。それから50年後、ようやく「アイヌ民族を語らなければ北海道の歴史が語れない」という時代になってきた。そして、平成29年度の北海道博物館事業実績の「グループレクチャー」の件数ではアイヌ

関連が4分の1を占めていて、「はっけんプログラム」の実施についても2分の1をアイヌ関係が占めている。そういうことから、アイヌ関連の歴史的な事実と資料に基づいて、北海道博物館がアイヌの資料を大事にし、そこから研究していかなければ、博物館の将来性はないと思います。そういう取り組みをしないと、北海道博物館は北海道を代表する博物館になりません。白老にできる国立アイヌ民族博物館にお客様が集まってしまふ。お互い切磋琢磨して、アイヌ民族について道民に知らせる方法をもう少し工夫すべきです。前回(昨年度)の協議会専門部会でお話ししましたが、千歳における小嶋コレクションは、親子2代にわたって集めた資料を北海道博物館に寄付したものです。この実績を評価してほしいと私はお話ししました。これも含めて、アイヌに協力してきたシサム〔和人〕に、私は応えてあげたいし、博物館自体も応えてもらいたいと思います。

澤田部会長：国がアイヌを先住民族と認めてから歴史は変わっていますが、そのあたりの認識が、国にも道にも足りないように思います。

澤田部会長：他にはよろしいですか。ただ今、いただきましたご意見につきましては、今後の検討に反映していただくよう、お願いいたします。

議題(4) 今後のスケジュール等について

澤田部会長：次に、議題4として「今後のスケジュール等について」、事務局から説明をお願いします。

右代学芸主幹：資料5を見ていただきたいと思います。

(以下、配布資料5に基づいて、北海道立総合博物館協議会等のスケジュールについて説明)

澤田部会長：ただいまのスケジュールについての事務局からの説明について、ご質問・ご意見、ありますか。よろしいですか。

委員：はい。

議題(5) 意見交換・情報交換(要旨のみ)

委員：北海道命名150年に関わり話題になっていることだが、明治政府が定めたのは「北海道」で、武四郎が建言した道名は「北加伊道」である。この点が、現在の道による広報や各種の事業において十分に整理されていないように感じる。また北「海」道と北「加伊」道の違いに何らかの意味があるのか等、引き続き考えていくべきではないか。

委員：白老に民族共生象徴空間ができることによって、アイヌ文化に関わる集客が白老に集中し他がその影響を蒙るおそれを懸念している。しっかり連携していくこと、各地域がお互いに切磋琢磨することが大事だと考えており、そういう中では、北海道博物館の今後の取り組みに着目し、参考にしていきたいと期待している。また、象徴空間・国立博物館を訪れた

人々が、さらに他の地域へと回遊する線を作れるよう、お互い協力してやっていけばよいと希望している。

4 閉会

澤田部会長：最後になりますが、事務局から何かありますか？

右代学芸主幹：せっかくの機会ですので、総合展示を見られる方、あるいは現在開催中の特別展「幕末維新を生きた旅の巨人 松浦武四郎」展を見られる方がいらっしゃれば、ご案内いたしますので、お申し付けいただきたいと思います。

澤田部会長：それでは本日の専門部会は、これもちまして終了します。タネ オケレ クスネ ナ。ソンノ イヤイライケレ [もう終わらしましょう。本当にありがとうございます]。

委員：イヤイライケレ [ありがとうございます]。

澤田部会長：ありがとうございます。

